



搾取の実態をつかもう



厚生労働省の諮問機関が最低賃金を引き上げる決定をした。2002年に最低賃金が時給で表されるようになってから最大の上げ幅ということだ。安倍首相は最低賃金を毎年3%あげて全国平均を将来1000円にするのだという。東京（最賃934円）ではそれを2年後に実現できるが、我が徳島県（最賃695円）が到達するのは千支がようやく一回りした12年後になる。仮に1000円になったとしても年収は240万円だ。しかも労働者の半分近くが不安定雇用なのだから、いつまで生活できるか分からないまま生きていかなければならない。ブラックな働き方を推し進めているのは日本政府なのがよく分かる。

安倍首相が愛してやまないアメ

リカでは、連邦政府の決めた最低賃金を飛び越して、15ドル（約1600円）にする条例が相次いで自治体で可決されている。背景にはファーストフード店の労働者が働いてもなお公的支援を受けなければ生活できない実態と、それに比べて役員報酬がべらぼうに高いという格差に対抗する労働者のムーブメントがあった。賃金が上がることよって首切りが懸念されたが、逆に失業率が2%近く改善された自治体も出てきている。

賃金が労働力の価値どおりに支払われていない実態と、価値どおりに支払われたとしても（実際はまだ搾取されているが）、会社は倒産などせずまだ儲けられることが、現実起こっている現象で学ぶことができる。

古典を学ぶことによって、合理化に負けない視点が養われる。

『月刊まなぶ』企画編集委員 吉田 英和